

事例検討会におけるスーパーバイジーの実践行為とその構成要素**ー主任介護支援専門員に対する量的調査からー**

○ 鹿児島国際大学 氏名 小松尾 京子 (会員番号 4895)

キーワード：事例検討会 スーパーバイジー スーパービジョン

1. 研究目的

多様化・複雑化、そして深刻化を呈する現代の生活課題に対応するには、チームアプローチや多職種連携が欠かせないことから、事例検討会は必須のものとなっている。さらに、地域共生社会に向けて、総合的かつ包括的な支援が求められることから、地域課題への対応やサービスの質の確保、高い専門性等が社会から要請され、専門職の質向上やサービスの質の向上についても期待されている。事例検討会への期待や求められる機能がより高度化しているといえる。

従来、事例検討会とスーパービジョンは異なるものとして、論じられることが多かったが、近年では事例検討会を活用したスーパービジョンの実践が注目されている(渡部 2007、山崎 2018、小松尾 2020)。事例検討会がスーパービジョンとして機能するには、構成メンバーの多数を占める参加者(スーパーバイジー、以下「バイジー」)の果たす役割が重要になる。これまでスーパーバイザーやファシリテーターの役割については指摘されてきたが、バイジーの果たす役割については、十分に言及されていない。本研究の目的は、事例検討会においてバイジーが果たしている機能と役割を明らかにすることである。なお、バイジーは事例提供者と参加者の立場に分かれるが、本発表では事例提供者を除くバイジーを対象として報告する。

2. 研究の視点および方法

調査対象者は地域包括支援センターの主任介護支援専門員である。九州8県のすべての地域包括支援センター656か所に調査票を郵送した。調査時期は2025年1月～2月である。回収した調査票は169通で回収率は25.8%である。事例検討会にバイジーとして参加したことがあると回答し、「バイジーとしての実践行為」の項目で欠損値のない128通を統計的分析の対象とした。

まず基本属性の単純集計を行った。次に「バイジーの実践行為」の内容を明らかにするために、回答分布を確認した後、探索的因子分析(プロマックス回転を伴う主因子法)を行った。抽出された因子の内的整合性(信頼性)を確認するため、各因子のCronbachの α 係数を算出した。統計的な分析にはIBM SPSS Statistics Ver.29を使用した。

3. 倫理的配慮

本調査は無記名自記式質問紙を用い、事業所名・個人名が特定されないようにした。調

査の趣旨や手続きなどを同封した文書で説明した。さらに調査に協力しないことで生じる不利益などは生じないこと、得られたデータは研究目的以外で名使用しないこと等を明記し、回答をもって承認が得られたことにした。本発表に関連して、開示すべき COI はない。本研究は鹿児島国際大学教育研究倫理審査委員会（承認番号：24-18）の承認を得ている。

4. 研究結果

1) 回答者の基本属性

地域包括支援センターの運営は、直営が 44 か所 34.6%で最も多く、次いで社協以外の社会福祉法人 34 か所 26.8%であった。回答者は、女性が 80 人で 63.0%、男性が 47 人で 37.0%であった。平均年齢は 51.8 歳で、40 代、50 代で全体の 75%を占めていた。保有資格は、社会福祉士 37.0%、介護福祉士 52.8%、精神保健福祉士 4.7%、保健師 6.3%、看護師 18.9%であった。

2) 「バイジー（参加メンバー）の実践行為」に関する探索的因子分析

「バイジーの実践行為」37 項目の平均値を確認し、プロマックス回転を伴う探索的因子分析（主因子法）を行った。因子構造を明確にするため、因子負荷量が 0.4 未満の項目や、複数の項目で因子負荷量が 0.4 以上を示す項目を除外し、解釈可能性なども加味しながら繰り返し因子分析を行った。その結果、最終的に 20 項目から構成される 5 因子が抽出された。標本妥当性を示す KMO 値は 0.832 であったため、因子分析における妥当性は確保されていると判断した。

第 1 因子は 5 項目から構成され、【議論を深める】と命名した。第 2 因子は 5 項目から構成され、【場の雰囲気配慮する】と命名した。第 3 因子は 4 項目から構成され、【積極的に意見を出す】と命名した。第 4 因子は 4 項目から構成され、【事例提供者の気づきに配慮する】と命名した。第 5 因子は 2 項目から構成され、【事例提供者をねぎらう】と命名した。Cronbach の α 係数は各因子とも 0.698～0.820 であることから、内的整合性を有するものであると判断できる。

5. 考察

バイジーは、事例検討会の一員として、【議論を深める】ために、自らの考えを表現し【積極的に意見を出す】ことをしていた。その際、【事例提供者の気づきに配慮する】ことや【事例提供者をねぎらう】ことをとおして、【場の雰囲気配慮する】ことを心がけていた。これらの因子は、事例の対応策の検討よりも事例提供者の気づきやふりかえりを志向しているといえる。また、第 3 因子の【積極的に意見を出す】を除き、スーパーバイザーの機能と類似する行為を実践していることが示唆された。バイジーは、事例提供者をねぎらい、発言しやすい場になるよう、事例提供者主体の事例検討会を志向していると考えられる。

*本研究は JSPS 科研費 23K01876 の助成を受けたものである。